

吉備南部における縄文－弥生移行期の収穫具

藤 井 翔 平

1 はじめに

日本列島における農耕開始期の収穫具と言えば、水稻農耕と共に朝鮮半島から伝来した磨製石庖丁が有名であるが、吉備南部⁽¹⁾では磨製石庖丁の出現以前の縄文時代後・晩期から、打製の収穫具が出土することが知られている（平井典1988、横田2003、高田2005）。一方で、弥生時代前期には新たに出現した磨製石庖丁が主要な収穫具として使用されることが指摘されており（平井典1988）、この地域では縄文－弥生移行期において収穫具に大きな変化があったことが窺える。

これまでの研究では、各段階の収穫具について個別に言及することはあっても、縄文時代から弥生時代にかけての収穫具の変遷を具体的な資料で示すことや、その変化の社会的背景まで言及されることはあまりなかった。よって本論では、吉備南部における縄文－弥生移行期の収穫具を、打製の収穫具が使用されるⅠ期（縄文時代後

期～弥生時代早期）、磨製石庖丁が出現するⅡ期（弥生時代前期前葉）、磨製石庖丁が普及・定着するⅢ期（前期中葉）の3段階に分けて整理し（表1）、変遷の具体的な様相と各段階における特質について述べ、その社会的

表1 縄文－弥生移行期の編年と本稿の時期区分

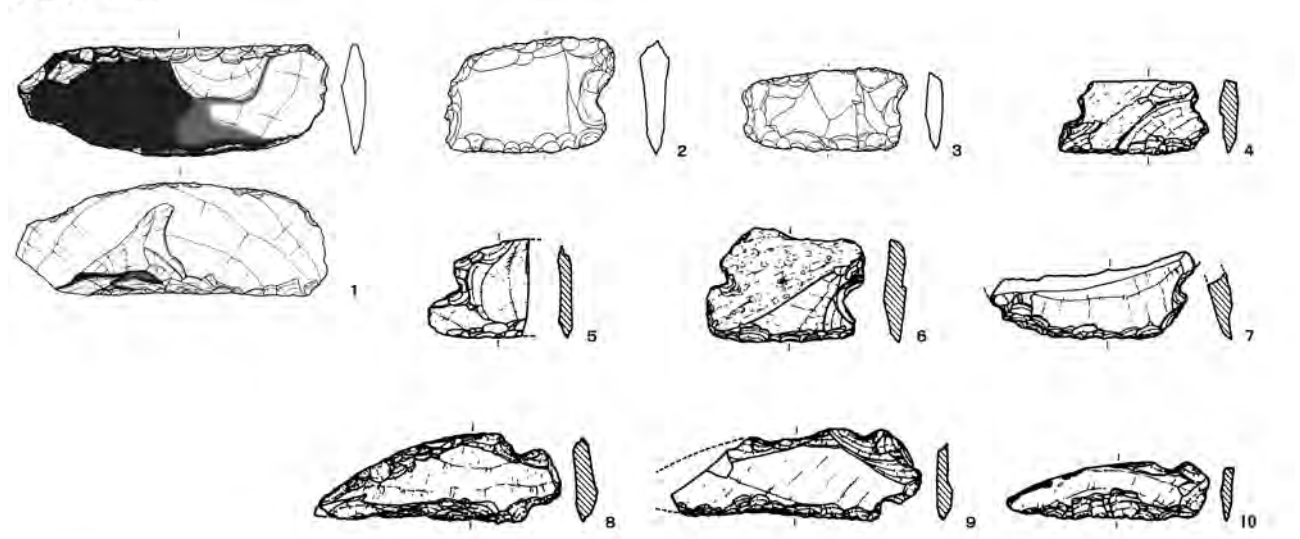
本 稿		千葉 2013	山口 2014	河合 2015	高橋 1980	平井典 1996
Ⅰ 期	縄文時代	後期前葉	中津式 福田 K2 式			
		後期中葉	津雲 A 式 彦崎 K1 式 四元式 彦崎 K2 式			
		後期後葉	福田 K3 式 馬取式			
		晩期	谷尻式 前池式	突帯文直前期 突帯文Ⅰ期		
	弥生時代	早期	津島岡大式 沢田式	突帯文Ⅱ期 突帯文Ⅲ期	早期 1 早期 2 早期 3 早期 4	
		前期前葉		突帯文Ⅳ期	前期Ⅰ-1 前期Ⅰ-2 前期Ⅰ-3	I-1
					I a I b I c	
		前期中葉			前期Ⅱ-2	I-2
					Ⅱ a	



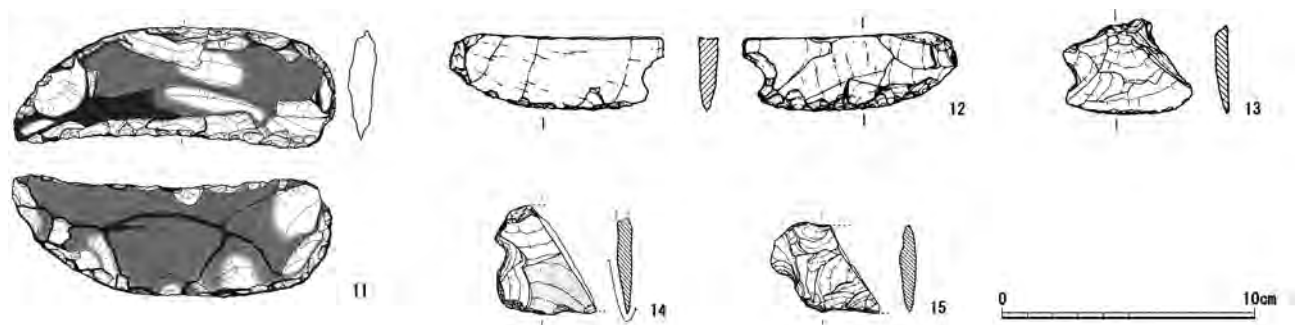
1. 百間川沢田遺跡・百間川原尾島遺跡 2. 津島遺跡・津島岡大遺跡 3. 南溝手遺跡 4. 清水谷遺跡
5. 大宮遺跡 6. 洗谷貝塚

第1図 関連遺跡分布図

縄文後・晩期



弥生早期



1・11. 津島岡大遺跡 2・3. 洗谷貝塚 4～10・12・13. 百間川沢田遺跡 14・15. 南溝手遺跡

第2図 I期の収穫具 (S=1/3)

背景について考察したい。

2 各期の様相

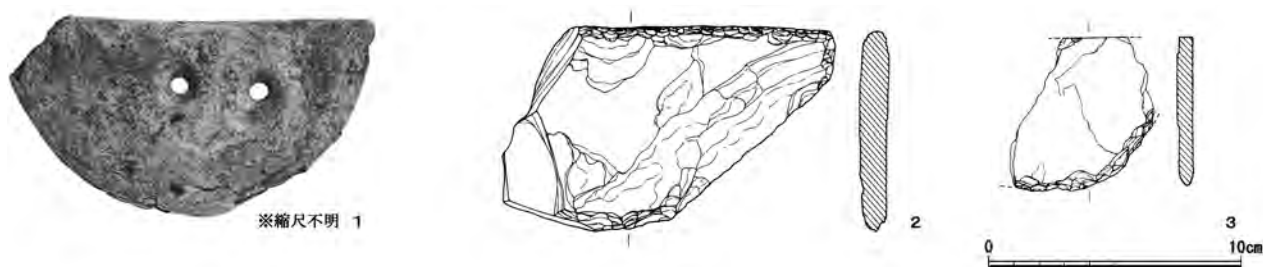
I期（縄文時代後・晩期～弥生早期）の様相

吉備南部で最も古い段階の収穫具と目されるのは、津島岡大遺跡から出土した明瞭な使用痕を持つ中形の石庖丁状石器⁽²⁾（第2図1）で、縄文後期前葉～中葉の土器を含む包含層から出土している（野崎編2003）。全長約12cm、幅4.5cmを測り、背部には刃潰しが入念に行われ、使用痕が片側に偏って付くなど、弥生時代の打製石庖丁と比較しても遜色のない資料である。また、百間川沢田遺跡や南溝手遺跡、洗谷貝塚などでも縄文後・晩期に遡る小形で紐かけ用の袢りを有する石庖丁状石器や小形の打製石鎌が出土している（第2図2～10）。

弥生早期の収穫具は、縄文後・晩期の様相が引き継が

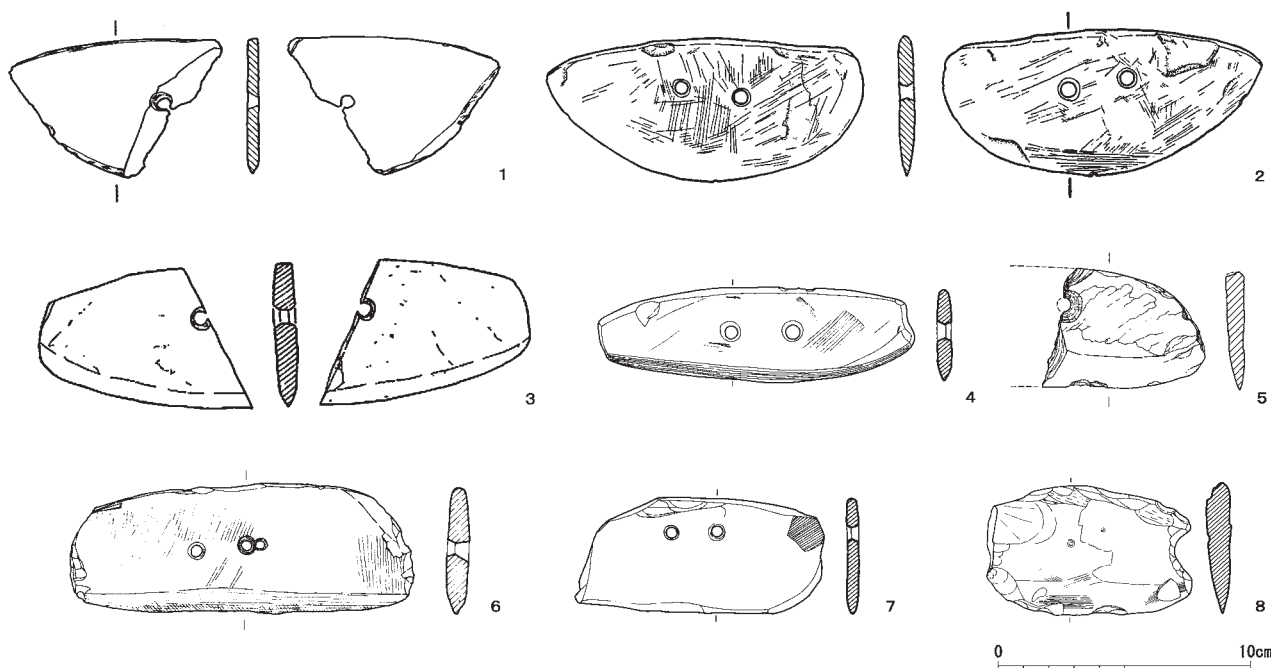
れ、中～小形の石庖丁状石器が出土している（第2図11～15）。ただ、この段階に比定できる石鎌はなく、組成に若干の変化が見られる。

I期の小形の収穫具の特徴として、使用痕があまり発達していないことや、磨滅があっても刃部周辺のみに限られることが多いことが挙げられる。使用痕の付き方や法量の違いから、この段階の小形の収穫具はスクレイパーとの機能分化を果たしていない石器であるとの評価が下されているが（高田2005）、小形品については妥当であると言える。一方、津島岡大遺跡から出土している中形の石庖丁状石器（第2図1・11）は、スクレイパーと比べて法量が大きく、使用痕も面的に広がっており、弥生前期以降の石庖丁とそれほど差があるようには思えない。吉備南部では津島岡大遺跡でしか出土していないが、瀬戸内海対岸の香川県でも本郷遺跡や永井遺跡な



1～3. 津島遺跡

第3図 II期の収穫具 (S=1/3)



1～2. 百間川沢田遺跡 3. 百間川原尾島遺跡 4・6～8. 大宮遺跡 5. 清水谷遺跡

第4図 III期の収穫具 (S=1/3)

どで縄文晩期の土器と共に類似した石器が出土しており（渡部明夫編1990、森下英治編2008）、今後も中部瀬戸内地域を中心に資料が増加する可能性は高い。これらはスクレイパーとは一線を画す、独自の収穫具の出現として評価できる。

この段階の石庖丁状石器の使用方法について、高田浩司氏は使用痕の観察から、中形品は弥生時代の石庖丁と同様の「穂摘み」のような使用方法を想定する一方で、小形品については刃部で穂を切断する「穂刈り」のような使用方法を想定しており（高田2005）、著者も同様の見解を持っている。小形品には挟りを持つものが多い一方で、中形品には挟りがないことなどからも、この段階の石庖丁状石器には使用方法の違いがあったことは明らかで、収穫具や収穫方法が画一化されていないという点も、この段階の大きな特徴として指摘できる。

か、収穫具や収穫方法が画一化されていないという点も、この段階の大きな特徴として指摘できる。

II期（弥生前期前葉）の様相

この段階の資料は非常に少ないが、津島遺跡の舟形土坑から直背外湾刃形の磨製石庖丁が出土している（第3図1）。直線的な背部や縦幅の広い体部など、北部九州の古式の磨製石庖丁と同様の特徴を有しており、搬入品かその忠実な模倣品である可能性が指摘できる⁽³⁾。

津島遺跡ではこのほか、磨製石庖丁の未成品と考えられる資料が出土しており（第3図2・3）、磨製石庖丁は出現とほぼ同時に在地での生産が開始されていることが窺える。この未成品も成品と同様の特徴を持った直背外湾刃形を呈しており、この段階には特定の形態を志向

する意識が存在していた可能性が指摘できる。また、未成品に使用されている石材は片理の発達した粘板岩系の堆積岩で、これまで石器には使われなかった石材を使用し始めている点は注目される。

一方、前段階まで主流だった打製の収穫具は出土していない。現状では前期前葉の資料自体が限られているため、今後出土する可能性はあるが、前期中葉までにはそのほとんどが姿を消していることは確実であり、この段階を画期として打製の石庖丁状石器から磨製石庖丁への移行が急速に進んだと考えられる。

Ⅲ期（弥生前期中葉）の様相

この段階の資料は、百間川沢田遺跡や清水谷遺跡、大宮遺跡など、この時期に成立した環濠集落から多く出土している（第4図）。

出土する収穫具のほぼ全てが磨製の石庖丁で、早期まで主流だった打製の収穫具はほとんど見られなくなる。大宮遺跡ではⅠ期の小形石庖丁状石器との折衷品と考えられる小形で挟りを有する磨製石庖丁が出土しているが（第4図8）、他に出土例はなく、一般的ではない。

磨製石庖丁の形態は、前段階に引き続き北部九州的な直背外湾刃形が見られるが、背部が若干湾曲し、端部が丸みを帯びるなど、若干の変形が認められる（第4図1・2）。また、前段階にはなかった弧状の背部や直線的な刃部を有する石庖丁が出現し始め（第4図3～8）、下條信行氏のいう「多型式併存」の状態が成立する（下條2002）。これらは未成品の出土状況などから同じ集落内で並行して生産・使用されていたと考えられ、この段階に特定の形態を志向する様相は見られない。

磨製石庖丁に使用されている石材は、高梁川や旭川、小田川など集落近郊の河川で入手可能な黒色粘板岩や流紋岩、砂質片岩で、黒色粘板岩が数的にやや多いものの、特定の石材へのこだわりは認められない。一部の集団による集中的な生産や広域の流通も想定できないが、未成品の出土に環濠集落への偏りが見られることから、小地域内での流通は存在していた可能性はある。

吉備南部ではこの段階に、手首を上にはねる動作で「穂摘み」を行う石庖丁が収穫具として完全に定着したと考えられる。早期以前には複数あった収穫具や収穫方法は一元化され、以後、鉄器が普及する弥生後期までこの状態が維持されることになる。

3 各期の収穫具の特質とその背景

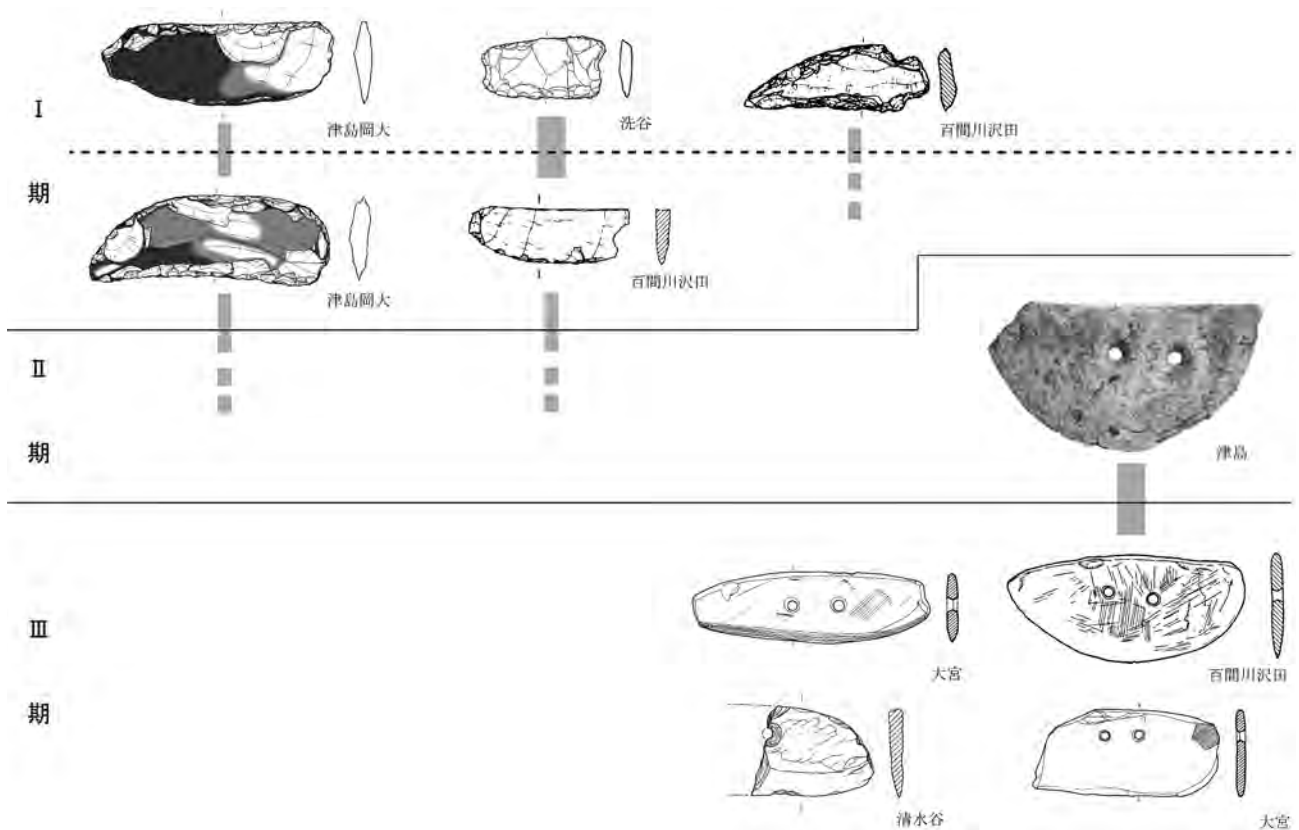
以上、吉備南部における縄文・弥生移行期の収穫具の変遷を3段階に分けて見てきたが、それをまとめたものが第5図である。以下では、前項までに指摘してきた様相を踏まえて、各段階の収穫具の特質と、想定される社会的背景について考察していきたい。

Ⅰ期の収穫具の特質としてまず指摘できるのは、サヌカイト製の打製収穫具が大陸系磨製石器に先駆けて出現し、定着していることである。数的に多いのは小形品であるが、先述のように津島岡大遺跡から出土している中形の石庖丁状石器はスクレイパーからの機能分化が想定できる独自の収穫具の創出として評価できる。吉備南部の集団はこの段階に、サヌカイトを用いた独自の収穫具を生み出すことで、農耕という新たな生業に適応しようとしていたことがうかがえる。

弥生早期には壺が器種として定着し（河合2015）、稲の粃圧痕の検出例が増加するなど（山口2014）、吉備南部にも大陸由来の農耕文化が着実に定着しつつあったと考えられるが、収穫具は大陸系の道具を受け入れることなく依然として縄文的な打製石器を使用し続けている。収穫具だけでなく、この段階には壺以外の遺物に大陸系の要素がほとんど見られないことから、その背景には縄文系の組成を可能な限り残しながら、農耕という新たな生業を取り入れていった在来集団主体の社会を想定することができる。

ただし、早期以前の収穫具は前期以降と比較すると出土量が圧倒的に少なく、遺跡の動向も時期が下るにつれて集住や集落の拡大が見られたり、遺跡数が急激に増加したりする傾向はないことが指摘されている（山本2019）。よって、この段階の栽培活動はあくまで平野部の限られた集団が網羅的な食糧獲得手段の一つとして行っていたものであり、縄文的な社会・経済構造を覆すものではなかったと考えるのが自然であろう。この段階の収穫具や収穫方法にバリエーションが認められることも、生業としての農耕の未成熟さを示すものと言える。

弥生前期に入ると、新たな収穫具として磨製石庖丁が出現し、定着する。注目されるのは、前期前葉から中葉にかけて、それまで使用されていた打製の収穫具がほとんど出土しなくなり、新出の磨製石庖丁がそれに替わっ



第5図 吉備南部における縄文―弥生移行期の収穫具の変遷

て主流となっている点である。現状で前期前葉～中葉に比定できる打製の収穫具はほとんどなく、磨製石庖丁は吉備南部に伝播すると、移行期を経ず、短期間のうちに主要な収穫具として定着したと考えられるのである⁽⁴⁾。

吉備南部では弥生早期まで、農耕文化の受容はあくまで既存の組成の中に新しい道具が加わる形で行われていた。収穫具や壺などの器種が新たに出現したとしても、それまでの縄文的な組成が変化することはほとんどなかったが、弥生前期に至ると、新たに出現した道具が、それまでの道具に代わる現象が表れ始め、石庖丁のほかにも土器ではそれまでの突帯文甕に代わって如意形口縁を持つ遠賀川式の甕が主流となり、弥生早期まで一定の割合を占めていた浅鉢が消滅するなどの変化が生じている(平井勝1992)。

さらに、この段階に出現した新しい道具は、それまでになかった方法で製作されているという共通点を有している。遠賀川式の土器は、縄文時代にはない外傾接合や刷毛目調整、覆い型野焼き法による焼き締まった赤褐色の器表面という製作技法上の革新的な特徴を有していることが知られているが、石庖丁も、それまでほとんど使

用されなかった粘板岩系の堆積岩を石材として用いる点や、穿孔を施している点などに製作技法上の革新性を見出すことができる。

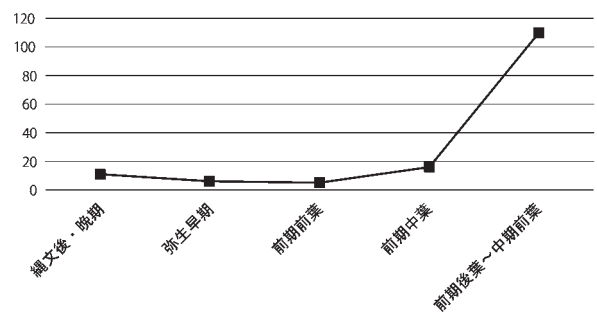
弥生早期から前期にかけて生じたこの変化は、それまでの緩やかな変化とは明らかに異なっていると言える。大陸由来の農耕文化は、弥生早期まで部分的・段階的にしか受容されてこなかったが、前期前葉を画期として、さまざまな要素が複合的に吉備南部に受容され、一部は縄文的な要素を払拭しつつ定着していった。変化が外見だけでなく、石材選択や製作技術にも及んでいることは、その背景に新たな文化や技術を携えた移住民の存在があったことを示唆していると考えられ、津島遺跡出土の磨製石庖丁が北部九州など吉備南部に先んじて大陸系の磨製石器を受容していた地域のもとの形態的に極めて類似していることは、この段階の両地域に何らかの関係があったことを窺わせている。

ただし、前期前葉の画期に、縄文的な要素が全て断絶あるいは変容したわけではない点は注意が必要である。例えば、石鏃やスクレイパー、石錐などの小形打製石器は前期以降もほとんど変容せずに用いられているし(平

井勝1992)、なにより吉備南部では前期前葉段階に石庖丁以外の大陸系磨製石器が欠如している⁽⁵⁾。部分的な遺物の変化が認められても、大陸系の文物がセットで出土しない以上、他地域の集団による入植のような状況は想定できず、移住は少数の移住民が在来の農耕集団に取り込まれるような形で行われたと考えるのが妥当であろう。前期前葉段階の土器が出土する集落の多くは、縄文後・晩期から継続して利用されているという共通点を有していることも(渡邊2000)、それを裏付けていると言える。

前期中葉には、磨製石庖丁が収穫具としての地位を確立し、同時に、多様な形態の石庖丁が生産される「多型式併存」(下條2002)の状態が成立する。この「多型式併存」は瀬戸内地域の特徴とされているが、この段階の石庖丁を観察すると、あえて多様な形態を志向していたと言うより、むしろ前期前葉段階には存在していた形態を一定に整えようとする意識が低下した結果として多様化が生じたという印象を受ける。この段階で特定の形態の石庖丁が生産・使用されているのは大陸に近い玄界灘沿岸地域のみであり、その背景には「大陸からの規制」が想定されている(下條2002)。「規制」の具体的な様相は定かではないが、これを大陸の集団との日常的な交流の中で形成される共通観念と考えれば、石庖丁の形態の多様化は、大陸との繋がりの薄さ、交流頻度の低さを示すものと考えることができる。よって、収穫具の様相から見れば、前期中葉以降の吉備南部に大陸との直接的で継続的な交流は想定できないと言える。また、吉備南部を含む瀬戸内地域では、磨製石庖丁の原石として様々な形状をした自然の河原石が用いられたと考えられており(小野2008・2010、藤井2016)、このような生産体制が形態の多様化に拍車をかけた可能性も指摘できる。

最後に、収穫具の出土量に注目してみると(第6図)、縄文後・晩期から弥生早期にかけては低調だった出土量が、前期前葉を境として増加傾向に転じ、前期後葉～中期前葉にはそれまでの10倍以上に達していることがわかる。収穫具増加の背景には本格的な農耕社会の成立による収穫量や人口の増加を想定することができるが、これは打製の収穫具が使用されていた縄文後・晩期から弥生早期には見られない現象であり、前期前葉における磨製石庖丁の受容と定着がその契機となっていることが窺え



第6図 吉備南部における収穫具出土量の変遷

る。このことから、前期前葉から中葉にかけて生じた打製の収穫具から磨製石庖丁への急速な転換は、吉備南部の人々の生業に対する意識の転換が反映されている可能性が指摘できる。すなわち、弥生早期まで、人口増加を伴わない、縄文的な網羅的食糧獲得経済に留まっていた吉備南部の集団が、人口増加と耕地の拡大を繰り返す成熟した農耕社会を志向し始めた時、磨製石庖丁という新たな道具が積極的に受け入れられたと考えられるのである。もちろん、実際の社会変化は前期を通じて少しずつ進行したと考えられるが、その方向性を決定づけたのが前期前葉の画期であり、磨製石庖丁の受容と定着は、それを象徴的に示す事象として理解できるのである。

4 おわりに

以上、吉備南部における縄文～弥生移行期の各段階の収穫具の特質と、想定される社会的背景について述べた。縄文後・晩期から弥生早期の収穫具については、大陸系の収穫具である磨製石庖丁の出現以前に独自の打製収穫具を創出している点や、収穫具・収穫方法にバリエーションがあった点をその特質として指摘し、その背景として縄文系の組成を可能な限り残しながら、農耕という新たな生業を取り入れていった在来集団主体の未成熟な農耕社会の存在を想定した。弥生前期前葉の収穫具については、新たに大陸系の磨製石庖丁が出現し、それまで使用されることのなかった新しい石材や製作技術が受け入れられ、ほとんど移行期を経ることなく打製の収穫具と入れ替わるように定着した点をその特質として指摘し、その背景として吉備南部の在来集団との交流の中で新たな文化をもたらした移住民の存在を想定した。さらに、収穫具の出土量の変化から、打製の収穫具から磨製石庖丁への転換を、縄文的で未成熟な農耕社会から耕地拡大と

人口増加を繰り返す成熟した農耕社会へという、生業に対する価値観の転換と関連した現象として理解した。

最後に触れておかなければならないのが、吉備南部で前期後葉から出現するサヌカイト製打製石庖丁についてである。この打製石庖丁については、早期以前の石庖丁状石器に系譜を求める意見（平井典2007）と、石庖丁状石器とは別に、前期以降の磨製石庖丁の影響で成立したという意見（高田2005）があるが、著者は、前期前葉～中葉に確実に比定できる資料がないことから、打製の収穫具は吉備南部では前期中葉段階までに一度途絶したと考えている。ただし、前期後葉以降盛んに用いられる打製石庖丁の祖型は早期以前の石庖丁状石器であると考えており、その変遷は吉備ではなくサヌカイトの原産地である讃岐で追える可能性が高い。よって、吉備南部の前期後葉以降のサヌカイト製打製石庖丁については、早期以前の伝統や磨製石庖丁の影響ではなく、讃岐との関係で理解するのが妥当であると考えが、詳細については別稿に譲ることとしたい。

本論を作成するにあたり、以下の機関にご協力いただいた。記して感謝の意を表します。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、総社市埋蔵文化財学習の館、矢掛町教育委員会

註

- (1) 本論では、現在の行政区分における岡山県南部と広島県東南部を含む範囲を「吉備南部」と呼称する。
- (2) 本稿では、縄文時代から弥生早期にかけて出土する石庖丁に類似する中～小形の打製の収穫具を、弥生時代の打製石庖丁と区別するために「石庖丁状石器」と呼称する。
- (3) 現物は失われており、石材等の詳細な検証はできない。
- (4) 同様の現象は吉備南部における突帯文土器から遠賀川式土器への変化においても指摘されている（小林1998）。
- (5) 百間川沢田遺跡から弥生早期に遡る大型蛤刃石斧が出土したとの報告があるが（平井勝1990）、詳細な出土状況や共伴土器が確認できず、その評価は現状では保留せざるを得ない。

参考・引用文献

江見正己編1980『旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘

調査Ⅰ』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39 岡山県教育委員会

小都 隆編1976『洗谷貝塚』 福山市教育委員会

小都 隆編1978『大宮遺跡第1次発掘調査概報』広島県教育委員会

小野倫良2008「今治平野出土石庖丁の石材とその産出地」『地域・文化の考古学－下條信行先生退任記念論文集－』下條信行先生退任記念事業会

小野倫良2010「石庖丁－地域別の生産流通モデルに関する一考察－」『季刊 考古学』第111号 雄山閣

河合 忍2015「中国・四国」『考古調査ハンドブック12 弥生土器』 ニュー・サイエンス社

桑田俊明編1979『大宮遺跡第2次発掘調査概報』 広島県教育委員会

小林青樹1998「弥生時代早・前期の津島岡大遺跡とその周辺」『津島岡大遺跡10』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第14冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

下條信行2002「瀬戸内における石庖丁の型式展開と文化交流」『四国とその周辺の考古学 犬飼徹夫先生古稀記念論集』犬飼徹夫先生古稀記念論集刊行会

高田浩司2005「中部瀬戸内地域の縄文時代における収穫具について－津島岡大遺跡出土の石器を中心に－」『津島岡大遺跡16』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第21冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

高橋 護1980「山陽1」『考古学ジャーナル』No.173 ニュー・サイエンス社

千葉 豊2013「中国・四国」『講座日本の考古学3 縄文時代上』 青木書店

二宮治夫編1985『百間川沢田遺跡2 百間川長谷遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59 岡山県教育委員会

野崎貴博編2003『津島岡大遺跡12』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第17冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

平井典子1988「中・四国における弥生時代の石器について」『考古学ジャーナル』No.290 ニュー・サイエンス社

平井典子1996「備前・備中」『Y A Y !』 弥生土器を語る会

平井典子2007「弥生時代－石庖丁・磨製石斧・石鏃を中心に－」『季刊 考古学』第99号 雄山閣

平井 勝1990「弥生時代の水田開発」『図説 岡山県の歴史』河出書房新社

平井 勝1992「弥生時代への移行」『吉備の考古学的研究（上）』

山陽新聞社
平井 勝編1993『百間川沢田遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84 岡山県教育委員会
平井 勝編2000『津島遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告151 岡山県教育委員会
平井泰男編1995『南溝手遺跡1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告100 岡山県教育委員会
藤井翔平2016「石庖丁の形態的多様性に関する一考察」『広島大学考古学研究室50周年記念論文集・文集』 広島大学考古学研究室50周年記念論文集・文集刊行会
森下英治編2008『本郷遺跡 川原遺跡』香川県教育委員会
矢掛町教育委員会編2001『清水谷遺跡<一本木地区>』矢掛町埋蔵文化財発掘調査報告1 矢掛町教育委員会
柳瀬昭彦・澤山孝之編1997『百間川兼基遺跡3 百間川今谷遺跡3 百間川沢田遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告119 岡山県教育委員会
山口雄治2014「中部瀬戸内北岸地域における縄文時代晩期後葉」『中四国地域における縄文時代晩期後葉の歴史像』 第25回中四国縄文研究会徳島大会事務局
山本悦世編1992『津島岡大遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第5冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
山本悦世2019「岡山平野における沖積平野形成過程と遺跡動態」『日本考古学協会2019年度岡山大会研究発表資料集』 日本考古学協会2019年度岡山大会実行委員会
横田美香2003「第3節 縄文時代後期の石庖丁状の石器」『津島岡大遺跡12』 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第17冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
渡邊恵里子2000「岡山県南部地域における遠賀川系土器の様相」『突帯文と遠賀川』 土器持寄会論文集刊行会
渡部明夫編1990『永井遺跡』 香川県教育委員会

挿図出典

第1図 国土地理院HP（陰影起伏図）を基に著者作成（海岸線は推定）
第2図 1：野崎貴博編2003（使用痕は著者が加筆）、2・3：小都 隆編1976、4～10：二宮治夫編1985、11：山本悦世編1992（使用痕は著者が加筆）、12：平井 勝編1993、13：柳瀬昭彦・澤山孝之編1997、14・15：平井泰男編1995
第3図 1～3：平井 勝編2000

第4図 1・2：二宮治夫編1985、3：江見正己編1980 4・7・8：小都 隆編1978、5：矢掛町教育委員会編2001、6：桑田俊明編1979
第5図 著者作成（実測図の出典は第2～4図と同じ）
第6図 著者作成
表1 著者作成